



13. my experience of life 私の人生の経験  
I've experienced life here.  
vt

12. the solution of the problem 問題の解決  
we solved the problem.  
vt

(b) a. に於けるF (=of) も N FN の N が自他両用動詞の派生形の場合は当然F選択に変化が生ずる。1, 9, 例でも明らかなように, 10, 13例に於いても動詞がよりVI性, もしくはVI用法がより多いものであれば N FN に於けるFも 'of' の場合は殆どないと見てよい。

1. a professor at Harvard 大学の教授  
He professes at Harvard Univ.  
vi

10'. a student at Cambridge Univ. ケ大学の学生  
He studies at Cambridge Univ.  
vi

14. an impression on my mind 心の印象  
It impressed indelibly on my mind  
vi

(c) 更に N FN で N が自動詞性の場合と一寸異なるが, その動詞はVTでありながら主語が人間である場合大体に於いて受動態をとるものがあるがこの場合やはりF選択基準に動揺が生ずる。

N FN (N ← VT)

13. my experience of life 人生の経験  
NP+V (Be+VTed+F) +NP

13'. my experience in teaching children 児童教育の経験  
I'm not experienced in teaching children.

13''. my experience with horses 馬の経験  
I have been experienced (in dealing) with horses.

(註: (b), (c)いずれも(a)の基準を破る用法となるが対応する日本語が「NのN」型と変わらぬだけに, 日→英移行の際の大きな干渉となる。)

以上 N<sub>1</sub>FN<sub>2</sub> に於けるFが他要素と関係なく即ち他要素との共起なく選択される場合(\$1), 次にFが N<sub>1</sub> との共起関係即ち N<sub>1</sub> が特定のVT派生による特定の名詞である時は 'of' である場合, 更にこの場合でも N (VT) の性質により N of N の共起関係は崩れる場合を示し, F選択基準確立の難さを述べたが, その基準確立のため N FN 構造を外的要素との関係に於いて考察を加えたい。

### §3. VT+ (N FN)

他の要素の付加又は文 (S=NP+V+NP) の中で N FN 構造に変化が生ずる場合である。Fの選択に変化があ

るからその基準を見い出すべく実際例により考察を加えて見たい。

(a) N FN

12. the solution of the problem 問題の解決  
(NP<sub>1</sub>+VT+) NP<sub>2</sub> (= N FN)

12'. (I found) the solution to the problem.  
問題の解決 (を見出した)

(1) He has abandoned almost all hopes of finding a political solution through OAS to the 35-day old revolt.

(2) My talks have convinced me of the basic desires of both sides to stop fighting and find peaceful solution to their difficulties.

(3) "—that there will be no military solution to this war," said the British leader.

(4) I shall continue to work for a ceasefire and a peaceful solution of this tragic problem.

(5) The communique also said a peaceful solution of the Vietnam War should be sought within the framework of the Geneva Agreement of 1954.

(以上 (1)~(5) UPI)

(6) He saw no solution of anything (Dreiser).

(1), (2)は, 明らかにVT (=find) が NP<sub>2</sub> の内部構造に影響を与え F → F' (of → to) と変化させている。即ち特定動詞 find の場合はFは 'to', その他の動詞又は動詞の影響力の射程内には 'of' で(4), (5), (6)の場合と見てよいようである。そしてこのような基準の動揺が(3)の場合となって現われていると考えられる。

(b) N FN

14. an impression on our minds 心の印象  
(NP<sub>1</sub>+VT+) NP<sub>2</sub> (N FN)

14'. (I gave) an agreeable impression to him

(1) It made a deeper impression on our minds.

(2) It left an impression on the visitor not easily forgotten. (以上勝俣活用)

(3) Gen. Taylor also urged a continuing slow increase in bombing of North Vietnam to give an impression of the inexorability of greater discomfort to Communist leaders in Hanoi. (UPI)

この場合は明らかに N<sub>1</sub>FN<sub>2</sub> 構造内に問題がありFが N<sub>1</sub>, N<sub>2</sub> を結び付ける働きをしていると見るよりS (NP<sub>1</sub>+VT+NP<sub>2</sub>) の中で NP<sub>2</sub> (N<sub>1</sub>+N<sub>2</sub> → N<sub>2</sub>+F+N<sub>1</sub>) から生成されたものと考えらるべきであろう。だから基準用

法F (= 'of') が易しくF' (= 'to') に変化するのである。

(c) NFN

15. the key to the problem 問題の鍵

(1) to discorser (find) the key to the closed secret.

(2) to fit a key to a lock.

(b)でこの構造が文中のVT影響を受けたNP<sub>2</sub> (N<sub>2</sub>+F+N<sub>1</sub>)がそのままNP (NFN)として独立した構造に変わる場合を指摘したが、この(c)もそれが独立した機能となりSの中でなくとも、他要素の影響を受けることなくF='to'と固定化した例と言えよう。ただこの'to'も'for'との間に用法基準の動揺が見られるので絶対的なものとは言えない。(英文法シリーズ19, 前置詞, 下P. 122参照)

a key to (for) the solution of the problem

(cf. the key of the door/the keys of a typewriter)

(勝俣・活用)

## 2 章

「NのN」とNFNに於けるのFの干渉度について:

日本語を英語に移し変える時に大きな障害となる原因が第1章で述べた英語の機能語の持つ複雑さに起因することは確かである。日本語の前置修飾構造と英語の後置修飾構造の違いが第1の原因となることは勿論であるがこれは或る程度英語を習得した者には大きな障害とはならないのである。

日本語「NのN」は母国語では1箇の簡単な定型ですむのに——日本語の名詞の基本的特徴はあらゆる種類の「小辞」に従える不屈折語だと言うことである。しかし29もある関係小辞のうち名詞をしてその修飾する他の名詞と結んで1構成形をつくらせる機能をもっているのは「の」以外にない。(「日英両語の比較と英語教育」63頁)——英語となると第1章に於いて限られたそして基準が確立したようなものだけで考察したのでは判るように、まことに複雑に入り組んだ別々の定型を使いわけねばならない。このように簡単な定型から複雑な定型に移行する個所には基だしい干渉が生ずると考えられるので、1章に取り上げた範囲に於いて(日→英)移行に於ける障害を考察し何かしかのruleを見出したい。

§1. 1章1節で取扱ったNFNのFはそれ自体で働きがあり夫々意味があるが、対応する日本語「NのN」は一箇の機能語をもってすべてのFの機能に代用させようとするから両語の差異は極度に複雑な相を呈する。

NのN

NFN

街角の家 a house at the corner

五番街の家 a house in (on) the 5th avenue

レンガの家 a house of brick

赤い屋根の家 a house with red roof

そこで日本語より英語に移す場合にこの干渉のために起る False Extension (転移の適用範囲の拡張)による間違いをより少なくするには、

①NFNがN'sN型に変形可能である。

②そしてそれにより意味に曖昧性が生じないならば

F=ofでよい。(このNFN(F=of)は日本語「NのN」と一致するので問題はない。of=possessive 'of'の場合で、本論でも省略してある。)

③意味の伝達に誤解が生ずるようであればFを夫々の機能(verbal function)に従って選択しなければならぬ。

例: 「NのN」 「T氏の手紙」

NFN the letter of Mr. T

① Mr. T's letter

② 1. T氏の書いた手紙

2. T氏の送った手紙

3. T氏への手紙

4. T氏所有の手紙

③ 1. a letter (written) by Mr. T

2. a letter (sent) from Mr. T

3. a letter (sent or intended) for Mr. T

4. a letter of Mr. T

(註: 4. の場合も a letter owned by Mr. T とするのが普通であるから、結局この「NのN」はNFN(F=of)への移行が出来ない場合なのである。)

§2. 1章2節でNFNのN(←VT)の場合について考察を加え、そしてNとNの関係がVT+Oに相当する時は「NのN」→NFN(F=of)で良いと基準を示した。更に2節(b)に於いてNFNのN(←VI)の場合にふれたが、(日本語の「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」型でN<sub>1</sub>とN<sub>2</sub>がVT+Oの関係に相当しない場合)この場合でも日本語型が直ちにNFN(F=of)を連想させてしまうので日→英移行に非常に干渉が生ずる。それで英訳者は(a)「大学の教授」と(b)「文学の教授」の差、即ち同じ「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」構造に見えても中味は(a)がN<sub>2</sub>(←VI) (b)がN<sub>2</sub>(←VT)であることを敏感に判断しなければならない。

(a)NFN(F=at, in) a professor at a university

(b)NFN(F=of) a professor of literature

更に同じ様な構造でも、「A師の弟子」とか「A大学のB博士」とかの場合は「N<sub>1</sub>のN<sub>2</sub>」のN<sub>2</sub>はVT性でないがNFN (F=of)となる。一般的な possessive 'of' でなく positional 'of' と考えられる。(a pupil of A; Dr. B of A univ.)

§3. 日本語「NのN」を英語NFNに移行する際には他要素(文とか動詞)との関係も考慮しなければならない。1章3節で取扱ったNFNは文などの他要素の影響を受けてFの選択が変化するので「NのN」よりの移行に障害が大きいことを指摘したのであるが、NFNがVTの作用を受ける場合、VT+(NFN)は見方を変えれば、VT+N+(FN)即ち(FN)を副詞機能の前置詞句と考えられぬこともないのであるが一応NFN定型でF(=of)→F'(=to)となる例外的なものを見たい。

「NのN」

問題の解決(鍵)

- (a) the solution of the problem
  - (b) (find) the solution to the problem
  - (c) the key to the problem
- (a), (c)は固定用法, (b)は動揺しているが動詞との共起関係で大体固定して来ている。

以上、ごく限られた構造定型について両語の関係を論じ、言語移行(日→英)即ち翻訳に於ける障害を究明したのであるが問題の大きさ、困難さを改めて認識せざるを得ない。

(Ang. 25th, 1967)

(参考文献)

1. Everett Kleinjans: A Descriptive-comparative study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-Head Modification Patterns.
2. Charles C. Fries: American English Grammar
3. 太田朗: 「共起」と「同じ個の組」(英語青年六月号, 1967)
4. 梶田優: 「辞書前の構造」(英語教育三月号, 1967)
5. 研究社: 英和活用大辞典
6. 秋田英語英文学: No. 8 Dec. 8, 1963〔作・文〕
7. 英文法シリーズ: 「前置詞」
8. Paul Roberts: English Syntax
9. 寺村秀夫: 「受動構造について」(英語青年五月号, 1967)